様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２３日現在

機関番号：22604
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22592524
研究課題名（和文）　子育てを支える小児外来看護システムおよび外来看護師育成プログラムの構築
研究課題名（英文）“The Construction of the nursing system and the nurses' education program in outpatient clinics for children”.
研究代表者
飯村　直子（IIMURA　NAOKO）
首都大学東京・人間健康科学研究科・教授
研究者番号：80277889

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、子育てを支えるという観点から小児外来の看護システムと外来看護師育成プログラムを構築することであった。まず日本、および日本と同様に少子化という課題を抱えているドイツ、カナダ、韓国の子育ての現状について文献検討を実施した。次に、首都圏近郊の子育て支援サークルにおいて家族および支援スタッフへの面接調査を、総合病院の小児科外来において観察及び面接調査を実施し、家族のニーズを把握した。また、オーストリアのウィーン市において育児環境や外来の状況などについて調査を行った。これらの結果をもとに小児外来看護システム及び外来看護師育成プログラムを構築した。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to construct the nursing system and nurses' education program in pediatric outpatient departments of the hospital. At first we reviewed the literature on the environment of child care in some countries facing the problem of declining birthrate. Next we described the demands from families for nurses' care through the observations and interviews at a pediatric outpatient department of the hospital and two childcare groups. We also interviewed mothers in Vienna, Austria. On the basis of these researches we constructed the nursing system and nurses' education program in pediatric outpatient departments of the hospital.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000 円	210,000 円	910,000 円
2011 年度	1,300,000 円	390,000 円	1,690,000 円
2012 年度	800,000 円	240,000 円	1,040,000 円
年度			
年度			
総　計	2,800,000 円	840,000 円	3,640,000 円

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：小児看護学、外来看護、子育て

１．研究開始当初の背景

近年、医療費の抑制を目的として入院期間の短縮化が政策的にも進められた結果、日常的に治療やケアをしながら地域で生活する子ども達が増加しており、小児医療においても外来での継続的なケアが重要視されるようになってきている。しかし、外来に求められる看護は継続的なケアだけではない。一般的に小児科の外来を訪れる患者の大半を占めるのは、むしろ風邪などの日常的な疾患で繰り返し受診する子どもであり(五十嵐, 2003)、小・中規模病院の外来やクリニックではその対応に追われている。

研究代表者は、「小児科外来における看護師の働きーある地域密着型中規模病院におけるエスノグラフィーー」(2007 年度日本赤十字看護大学大学院博士論文）の中で、地域の最前線に位置する医療施設の小児科外来における看護師の奮闘する姿を描いたが、核家族化、少子化が進行する現代社会の中で孤立している家族が外来で様々な援助を求め、看護師はその対応に追われているという現実が浮かび上がった。

小児救急医療の現場においても、子どもと家族の多様なニーズとそれに応えきれない医療の実態がある。日本看護協会では、このような現場で最新の知識・技術を持ち、自立して対応できる小児救急看護認定看護師の育成を 2005 年 4 月から行っているが、十分ではない。小児科外来や救急外来では、育児の知恵やコツを教えてほしい、また、子どもの症状にどのように対応すればよいかがわからない、不安でたまらないと訴えて受診してくる家族も多い。加えて、受診の機会を虐待やネグレクトの早期発見の場として捉えることの重要性も高まっている。このように、現在の外来には、単に疾患に対する治療やコントロールだけにとどまらない役割が求められている。

我が国の明日を担う子どもが健やかに成長するために、子どもと家族のニーズを知り、子育てを支援する小児外来看護システムおよび、そこで実際に援助をする高い実践能力を備えた外来看護師の育成プログラムを構築することは意義のあることと考え、本研究を計画した。

２．研究の目的

子育てを支える小児外来看護システムおよび外来看護師の育成プログラムを構築する。具体的には以下のことを明らかにする。

（１）小児の外来および少子化時代に子どもを育てている家族の現状や課題に関し、文献および外来エキスパート看護師との討議によって検討する。

（２）上記の検討をもとに、外来や地域の子育て支援グループにおけるフィールドワークおよび子どもと家族に直接面接することによって、そのニーズを把握する。

（３）同様の少子化問題を抱えるヨーロッパ、アジアおよび北米諸国から数ヵ国を選択して、子どもと家族のニーズおよび看護師の実践的支援活動について文献や現地調査を通して、検討する。

（４）上記の（２）および（３）の結果から、子どもと家族の様々なニーズに応え、子育てを支える小児外来看護システムおよび高い実践能力を備えた外来看護師の育成プログラムを構築する。

３．研究の方法

（１）「子育てを支える」という観点から、子どもを育てている家族の現状や課題に関して文献検討を行った。

また、出生率や GDP など、日本と同様に経済や健康・福祉の水準は良好であるが、少子化という問題を抱えている韓国、カナダ、ドイツ各国の子育ての状況について、文献および現地の看護職から情報を収集し、比較、検討した。

（２）小児科外来を受診する子どもと家族のニーズを捉える調査を首都圏の総合病院小児科外来において実施した。外来において子どもと家族の様子を観察し、また直接家族および看護師に面接を行い、家族のニーズと看護師の関わりについて分析した。

また、首都圏の 2 箇所の NPO 法人の子育て支援グループにおいても、子どもを育てる家族のニーズ、小児科外来の医療者に求めることなどについて、家族を対象に面接調査を実施し、データを分析した。また、こうした家族を支援している子育て支援グループの看護職スタッフにもスタッフとしての関わりの他、医療や行政等との連携を含む地域での育児支援に関する活動内容等について面接を実施し、データを分析した。

実施に先立ち、研究計画書を作成し、所属大学および協力施設の研究倫理審査委員会に研究計画書を提出し、審査を受け、承認を受けた。

（３）社会的、医療的環境が類似している国として、オーストリアのウィーン市を訪問し、以前当地に在住し、子育てサークルで家族の

支援に関わっていた看護師の協力を得ながら、育児環境や外来の状況、子どもと家族のニーズおよび看護師の実践的支援活動について家族や医療職者を研究参加者として面接調査を実施した。
　また、子育て環境の情報を得るため当地の保育園などの視察を行った。
　調査に先立ち所属大学の研究倫理審査委員会に研究計画書を提出し、審査を受け、承認を受けた。調査の準備、実施、データの分析などについて、小児看護専門家の意見を聞いた。

（４）これらの調査、研究結果を基盤として子育てを支える小児外来看護システムおよび外来看護師の育成プログラムの構築を進めた。

４．研究成果

（１）文献検討の結果、予防接種、乳幼児健康診査、保育システムに関して、日本と同様に経済や健康・福祉の水準は良好であるが、少子化という問題を抱えている諸外国と日本の現状には、大きな違いは見られなかった。
　一方、受診行動などを見ると親の不安による受診が多いなどの日本の特徴が明らかになり、諸外国との文化や環境の違いについてさらに文献を検討し、考察を深めた。

（２）総合病院の小児科外来における調査の結果、小児科外来では、受診する子どもの親の要求と看護師のケアには少なからずずれがあること、家族は看護師の援助を求めることを躊躇していることなどが明らかになった。
　一方で子育て支援グループは、母親たちの仲間作りに貢献し、そこでの仲間同士の情報交換や支え合い、また経験豊富な看護職の支援スタッフによるサポートが母親たちの子育ての力を育み、子どもが病気になったときの判断や行動に役立っていることが明らかになった。

（３）オーストリアのウィーン市在住の家族との面接の結果、母親たちはハーブや漢方薬などを用いる自然療法を家庭内で代々受け継いで実施していること、普段からかかりつけ医と良好な関係を築き、維持していることから不必要な受診は控えていること、子どもが急な病気になったとき、有職の母親は看護休暇を自由に取ることができること、また、同居・別居の別なく、祖父母や親戚との関係が強く、子育てに協力してもらえることなどが明らかになった。
　視察したウィーン市内の保育園では、親たちが子育てサークルを組織し、保育園の運営に積極的に関わっており、保育士や幼児教育専門家の支援を得て、子ども達が自由な発想や感性を育むことができる環境を整えていた。

（４）以上の結果を踏まえて、子育てを支える小児外来看護システムおよび外来看護師の育成プログラムについて、検討し、構築した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計４件）
① Iimura,N., Nishida,S.,Kai, K. & Yoshino, J.
Demands from Families for Nurses’Care in a Pediatric Outpatient Department in Japan. The 16th East Asian Forum of Nursing Scholars. 2013 年 2 月 20 日～22 日, The Emerald Hotel (Bangkok, Thailand).

② Nishida,S., Iimura,N. & Hirota, S.
Primary Care for Young Children with Common Disease’s Symptoms by Mothers at Home; Care of Austrian Mothers. The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centers of Nursing and Midwifery. 2012 年 6 月 30 日, ポートピアホテル (神戸).

③ 飯村直子. 西田志穂, 甲斐恭子
少子化が課題となっている諸外国と日本との子育て環境の現状と課題（第１報）－子育て支援政策とシステムの検討－. 第 58 回日本小児保健協会学術集会, 2011 年 9 月 2 日, 名古屋国際会議場.

④ 西田志穂, 飯村直子, 甲斐恭子
少子化が課題となっている諸外国と日本との子育て環境の現状と課題（第２報）－子どもを育てている家族の行動と求める援助－. 第58回日本小児保健協会学術集会, 2011年 9 月 2 日, 名古屋国際会議場.

６．研究組織

(1)研究代表者
飯村　直子　(IIMURA　NAOKO)
首都大学東京・人間健康科学研究科・教授
研究者番号：80277889

(2)研究分担者
西田　志穂　(NISHIDA　SHIHO)
共立女子短期大学・看護学科・講師
研究者番号：60409802

(3)研究協力者

中村　由美子（NAKAMURA　YUMIKO）
青森県立保健大学・健康科学部・保健学科・教授
研究者番号：60198249

広田　幸子（HIROTA　SACHIKO）
東邦大学　教育・研究支援センター・助教
研究者番号：70516161

吉野　純（YOSHINO　JUN）
杏林大学・保健学部・看護学科・講師
研究者番号：50269461

甲斐　恭子（KAI KYOKO）
首都大学東京・人間健康科学研究科研究生
研究者番号：なし